

目的 戦後の産業構造、人口構成、労働等、社会環境の変化は、食生活にも大きな影響を与えた。日本人の食の構成上、米は主要な主食食品として、また、エネルギー、蛋白質源として、大きな位置を占める食品である。近年の食生活の中で、米の消費量は減少傾向を示して来たが、今後、どのような消費傾向に向うかについては興味ある問題である。本報では、米の消費量が拡大した戦後から今日に至る米の消費構造と、それに影響を与える副食用食品について、また、所得階層より、米の位置を明らかにし、将来の食生活の中で米が果たす役割について分析し予測することを目的として研究を行った。

方法 総理府統計局「家計調査年報」を資料として、昭和38年から54年までの17年間について、各食品の消費量の変化を調査した。年間1世帯当りの購入数量から、1人1日当りのエネルギー供給量と蛋白質供給量を算出し、さらに、それぞれの食品が、どのくらいの割合でその年の総エネルギー供給量と、総蛋白質供給量に寄与しているかについて、各食品の寄与率を算出した。

結果 1) 主食の減少、副食の増加傾向がみられるが、エネルギー、蛋白質寄与率から主食間での競合はなく、予想された小麦加工品との競合がみられなかった。副食全体が米と競合している。2) 収入階層別に米の寄与率を求めると、昭和38年では、所得による影響の大きい食品であったが、階層差は年々小さくなり、ている。3) 米の低下傾向も昭和49年頃からゆるやかにになり、米の役割は、労働量低下に伴うエネルギー量を調節する食品として位置する。